

Title	高校教師という仕事：やりがいを感じる時
Sub Title	
Author	見上, 哲(Mikami, Satoru)
Publisher	慶應義塾大学教職課程センター
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学教職課程センター年報 (Annals of the Teacher Training Center Keio University). No.30 (2021.) ,p.91- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	日時：2021年 5月11日 (火) 18時30分～20時30分 場所：Zoomミーティングによるオンライン開催
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10203872-20220831-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高校教師という仕事—やりがいを感じるとき—

見上 哲氏

(東京都立町田高等学校非常勤教員・都立高等学校元教諭)

日時 2021年5月11日(火) 18時30分～20時30分

場所 Zoom ミーティングによるオンライン開催

はじめに

こんばんは。見上です。これから「高校教師という仕事—やりがいを感じるとき—」というテーマで話をさせていただきます。今日の話は、何か具体的なデータに基づいているとか、何か根拠があるという話ではなく、自分が40年近くにわたり都立高校で教員を続けた、その中で体験したこと、実感したことが中心になっています。ですから、僕の言うことが全て正解かどうかは分かりません。ただ、今日は「このように考え、教員をやっていた人がいるのだな」。そんなことを理解してもらえたらいいかと思い、話をさせていただきます。

私が勤めていたのは、ほとんどの期間が都立高校ということなので、例に挙げた話などは都立高校の形がどうしても多くなるかと思います。私立高校のことについては、また若干違うところもあるかと思います。そこら辺りは何かあれば、質問していただけたらと思います。

今日この話をするということで新聞を見ていたところ、5月9日付の朝日新聞系列の教育情報誌「EduA (エデュア)」に、「部活と勉強」というテーマの話が出ていました。そこに教員の仕事のことも出ていて、学校の教員や教育という中で、現在、部活動が注目されている気がしました。そこで今日は、そこら辺りの話をメインにして話を進めていきたいと思っています。

教員生活の中でのやりがいとは

はじめに教員の生活の中で、「どのような仕事において『やりがい』を感じるのか?」「どのような時に『やりがい』を感じるか」。仕事の内容は、皆さんが思っている以上に多くなっています。高校生のとき、学生するときには見えなかったような仕事は実はたくさんあり、これは現場に入ってみると気が付くということです。ですから、教員が大変だという話になるとときには、やらなければいけない仕事が多いので時間が足りない。そういうところに多くの原因が出てくると思います。それから、どんなときにやりがいを感じるかとなると、必ずしも大きな出来事ではなく、ほんの小さなささいなことに「ああ、よかったな」と感じるものがたくさんあるということです。

「どのような仕事において『やりがい』を感じるか」。結論から言うと、人により違う。僕の場合は、高校のときにバスケットボール部の部活動をしていましたが、その部活動の場面が非常に多かったということです。これはどうして人により違うのかというと、なぜ自分は高校の教員になろうと思ったか。そこが違うところから、やりがいを感じる場面が違うことが出てきます。

教員になろうとしたきっかけ

僕のように部活動が好きで、その指導者になりたいという形で教員になる人。あるいは小学校、中学校、あるいは高校の先生、担任の先生などの影響を受け、自分もなってみたいなと思って教員になる人。また、大学などで勉強している、あるいは研究を続けている中で、もう少し研究をやりたい。大学に残って研究をやるのもありますが、多くの場合は大学に残ることが大変な中で、高校の教員をやりながらいろいろな研究をやりたい。人それぞれ、教員になろうとしたきっかけが違うわけです。だから、どんな仕事においてやりがいを感じるかは、人により違います。

僕の場合、高校時代はバスケット部に所属していました。大学を受験して合格して、大学生活を続ける中でサークルに入りそびれてしまった。そんな場面があり、いつの間にか高校時代の同級生や先輩と一緒に、自分の高校に行ってバスケットをするようになったのですね。これが意外と楽しい。もちろん後輩と一緒に練習するだけではなく、その後に先輩や同期の仲間と一緒に遊びに行く、飲みに行く。そういうことが楽しかったのですが、そんな生活が学生時代は続いていました。

そして3年生になったときに、都立高校では外部指導員という名前ですが、先生

から部活動の指導者として後輩の面倒を見てもらえないかという話がありました。「では、やりましょう」。それまでは週に1～2度、自分が気に入ったとき、自分が気の向いたときにだけ行っていたものを、もう少し計画的に回数を重ねて部活動に参加するようになりました。

これが「意外と」と言うか、結構楽しく、「楽しくて」というか、充実した感じがありました。「さあ、今度はどうしよう、ああしよう」と、いろいろなことを考えているうちに、大学3年生が終わりを迎えようとしていました。当時は4年生になると就職の準備をしなければいけない。そこで考えて1年間、大学を留年しました。もう1回3年生をやり、外部指導員、コーチの仕事の続けてみました。

ところが、もう1年やっても結果は同じで、「もっとやりたいな」。そこで、どうしたらこういうものを続けられるのか。学校の教員になるのがいいのではないのかな。そんなふうに思って教員になった次第です。結果として、それから40年近く高校教師として、バスケットボールの指導者として仕事を続けてきました。だからこそ、どのような仕事においてやりがいを感じるかという、僕の場合は部活動の場面が多かったことになります。

実際にやりがいを感じた時

今度は「どのような時に『やりがい』を感じるか」。僕の場合は生徒と喜びを共有できたとき。少し大げさな言い方ですが、こういうときに「やっていてよかったな」という感じを持つことになりました。例えば部活動で、バスケットボールの大会に出て目標を達成した。東京都でベスト16になるとか、目標自体は全国大会に出るような大きな目標でなくても、生徒とともに立てた目標を達成したとき。これはもちろん、喜びがともにありますよね。それから、試合に臨むときに、下馬評では「相手のほうが強いだろうな」と言われている相手に対し、作戦を立てて計画を練り、そして試合に勝ったり、そういったときに大きな喜びがあります。

ただ、そんな大きな出来事でなくても、例えばバスケットボールを素人の子に、中学校でやったことのなかった初心者の子に教えているときに、教えているうちにシュートが入った、入るようになった。そういうときに生徒は、すごくいい笑顔をすることがあるのですね。「やった」。ほんとにシュートが1本入ったとか、そんなことですが、すごくうれしそうな顔をする。そういうときに「やっていてよかったな。教えてよかったな」。そう感じるがあります。

部活動の話をしました、これは授業の中でも同じです。私は政経という科目を

教えています。政経の授業は、世の中でどんなことが起こっているのか、今どんなことが考えられているのか。そんな話を中心にいきますが、生徒の中には今どんなことがあってということが全然分からない子もたくさんいます。そうしたときに自分の説明で、「先生、これどうなっているの」と言われ、「これはこうじゃないかな」。それで生徒が分かったときに、とてもいい笑顔になることがあります。そんな、ほんとに小さなことですが、そういうときに「教員をやっていてよかったな」と感じる次第です。

教員の仕事について

それでは、これから仕事全般ということで、教員にはどんな仕事があるのかという話を、順を追って説明していきたいと思います。高校教師の三つの主な仕事があります。一つは教科指導です。これは、いわゆる授業です。授業といっても、勉強ができなくて、成績が悪くて、という生徒に向けた補習もあります。あるいは一方で、大学進学に向けた「講習」という名前で呼びますが、そういうものも含め、教科の指導が一つ大きな仕事です。

それから、担任・分掌業務があります。担任は、皆さんも高校時代、クラスに担任がいて、場合によっては担任の先生に進路の相談をしたことがあると思います。これは比較的分かりやすいものですが、それ以外に分掌業務というものがあります。都立高校の場合だと、学校の先生の半分ぐらいの人が担任をやり、残りの半分ぐらいの人が分掌業務に就く。学校の規模により多少違いますが、そのように仕事の内容が分かれています。そして、授業のほかに、ほんと意外とやることがたくさんあるということです。

三つ目は部活動の指導です。これは最近、中学校などではよく話題になっているものです。あまりいい言葉ではないですが、教員の仕事がブラック化している。そう言われる要因になっている部分があるところです。部活動指導とほかの仕事、そして教員の仕事については後で詳しく述べるとして、一つだけここで頭に入れておいてほしいのは、部活動の指導に関しては中学校と高校では少し違う部分があることです。

それは何かというと、中学校の場合は生徒の安全などを考え、部活動の時間中にはその場にいてはいけません。例えば体育館の部活動であれば、一緒に体育館にいないといけない。グラウンドでやる部活動であれば、一緒にグラウンドにいないといけない。そういう状況があるように思われています。

一方、高校の場合は、必ずしもその現場にいないとはいけないわけではない。これも学校により、あるいは種目により違うのかもしれませんが。高校の部活動、特に都立高校の場合には、必ずしもその現場にいることは必要ない。だから中学校の先生方が言う、部活動のブラックとか部活動の大変さと、高校では違うかもしれません。そこら辺りは頭に入れておいていただき、これからの話を聞いていただけるといいかと思います。

教科指導

高校の教員の仕事について、順番に話を進めていきます。まず、教科の指導です。これは高校教師の仕事の中心です。はっきり言うと、これができないと話にならない、これができて当然という最も中心となる仕事です。なぜ、そうなるかという、高校の場合は専科の授業ということで、一つ一つの教科について専門の先生が授業で教えることになります。自分のクラスの担当の先生がベテランであっても、あるいは新規採用の若い先生であっても、生徒にとって先生は先生です。だから、一定程度授業ができないと話になりません。

最近、都立高校の管理職の先生の中には、都立高校の場合は異動があるから、ずっと同じ先生がいるわけではない。だから、誰が教えても同じ内容を教えられるようにするのだ。そうおっしゃっている先生方もいらっしゃいます。しかし、どうでしょう。同じ内容であっても、人それぞれいろいろな教え方、授業に対するいろいろなアプローチの仕方があるから楽しいのかな。僕はそう思います。だからこそ、教科の指導について最低限のことが必要で、それは当然のことだと思います。

授業の内容・教え方は変わっていく

教科指導は高校教師の仕事の中心だと言いました。実際にどんなことがあるのか。まず、教えるための内容の研究です。高校生に対し何かを教えるために、その内容について自分が知らなくてはいけない。そしてそれは、例えば皆さんがいま大学で研究したり、あるいは学んだりしていること、あるいは大学などではなく自分で本を読んだりして身に付けている教養。こういうものが非常に大きく関わってくるようになります。

英語の場合

一つの例を挙げます。英語の先生の場合、僕が高校生だった今から45年ぐらい前の英語の授業は、文法を教えるとする、その文法を教えるための文章を教科書につくり、そのための文章ですね。トムがどうしたとか、ボブがどうしたという文章をつくり、そこから文法を教える形でした。

ところが、今の英語の授業の教科書を見ると、誰か有名な人がどこかでやった演説、講演、あるいは本の中身などを載せ、その文章の中から文法を覚えていく。そのような授業です。とすると、英語の先生でも環境問題の論文、環境問題に関する講演。その英語の文章が出ていて、その中から文法を教えるときに、その前提として環境問題のことなどが少しは分かっていると全然教えられません。よく英語の先生から、環境問題について質問されたりすることもあります。英語の先生だから、あるいは数学の先生だからということではなく、一般教養的な中身が当然のように必要になってきているのが現在です。

それから、教え方の工夫も必要です。また昔の話になりますが、僕が高校生の頃は、先生が黒板の前に立って板書をしながら話を進めていく講義形式の授業が一般的でした。たまに生徒に発表学習をさせる先生もいましたが、ほとんどが講義形式の形を取っていました。ところが、今は教え方が大きく変わってきています。

アクティブラーニング

もしかしたら皆さんも高校時代から、そういったことを多数やってきたかと思いますが、「アクティブラーニング」という言葉が盛んに使われるようになりました。先生が教えるのではなく、生徒自身が主体的にいろいろなことを学んでいく。盛んにそう言われるようになったのは、ここ数年のことかもしれません。特に東京都では、アクティブラーニングという言葉が非常に強く言われるようになりました。そして、多くの学校がアクティブラーニングの推進校ということで、先生は教えない、生徒同士で教え合う、考える。そのような授業が多く行われるようになりました。

ただ、昨年からのコロナの関係で、生徒同士が議論をしたり、一緒になって考えたりということができなくなってきて、また授業のやり方には工夫が必要になってきている現状です。今までは生徒同士が輪になり、いろいろなことを言い合っていた。そういう授業ができない、さあ、どうしようか。今また、新たな局面を迎えていると言っていると思います。

それから教科指導の中には、教えた後の評価の仕方も重要になってきています。最近は評価というものにこだわる生徒も結構多くなってきています。一つには、その後の大学進学の際に、指定校推薦などの形で進学をしようということがあり、評価にこだわる。あるいは授業の中で生徒たちが考えたり、実際に自分自身でやっていくことが増えた結果、いろいろな評価の仕方が出てきたわけです。

体育の授業の例を出すと、以前だと体育の評価は走るのが速い、球技がうまい。実際に一緒に体育の授業をやってみれば、誰でも「あいつ、うまいな」「自分はちょっと遅かったな」と分かる。その上で評価をつけるのが一般的だったと思います。ところが最近は体育の授業では、実際に自分がやるだけではなく授業のやり方、競技のやり方を研究したり、進めたり、そういうことも体育の授業の一つとして考えられるようになっていきます。

そして生徒の中には、例えば走るのはタイムで言うと他の人よりもそんなに速くない。でも自分は高校で練習をしたから、これだけ速くなった。他の人は少ししか速くなってないけれど、自分はこれだけ速く走れるようになったから、そこを評価してくれ。そのようなことを言う生徒も出てきています。教えるだけではなく、それをいかに評価していくか。こんなことも教員の仕事として重要になってきています。

担任や分掌の仕事

それから、担任・分掌の業務。皆さんには担任以外の仕事は、なかなかイメージが湧きにくいと思いますが、われわれ高校教員の仕事として、これは大きな位置付けです。皆さんも経験があるかもしれませんが、担任には生徒との触れ合いの機会が非常に多いものです。特に最近は、いろいろな学校が面倒を見ることに力を入れています。そこで1学期に1回は生徒と面談をしろとか、毎日のようにホームルームで何かを言え。そのような形で、以前より担任の仕事量はものすごく増えています。

一方で、触れ合う機会が多いことから、担任の先生の影響を受け、「自分も教員になりたいな」。そう思うような生徒がいるのも事実です。実は、この担任以外に高校の先生の中には、半分ぐらいの先生が他の仕事をされていて、それを分掌と言います。多くの学校にあるのは、教務、生活指導、それから進路指導という名前で行われる分掌があります。こちらのほうはイメージが湧きにくいと思うので、次にそちらの話をしてみたいと思います。

担任以外の分掌の仕事

まず、教務部です。教務部は学校の中で、主に時間割を作成したり、あるいは学校全体の行事の調整をしたり、それから高校入試です。実際に自分の学校にどのくらいの生徒が入ってくるか、その入試関係の仕事をしたりします。分掌としてこのような仕事をしますが、一見それほど難しくないかと思う部分もあります。

時間割では英語でも何種類かある授業のうちで、1クラスが1日のうちに何時間も英語の時間が重ならないようにする。あるいは同じ教科の先生の授業が毎回午後に入る、あるいは毎回1時間目に入らないようにする。細かいことを言うと、考えなければいけないことがたくさんあります。それから、学校全体においていろいろな行事がある中で、それを1年中のどこに置くか。そういった仕事がたくさんあります。このことは生徒との関わりという点では非常に少ないかもしれませんが、学校の中ではとても重要で、学校の心臓部のような仕事です。そして、大変な仕事として考えられているものです。

それから、生活指導部です。文化祭、体育祭あるいは合唱祭もあるかもしれませんが、そういった生徒の行う行事全般を扱う。それから部活動の調整、そして生活指導と言われるものを取り扱う分掌です。分掌の中では、生徒との関わりは比較的多いものだと思います。

ただ文化祭、体育祭等の生徒の行う行事といっても、学校によりさまざまです。学校によっては生徒だけではこういった行事ができないので、先生が中心になり、どんどん生徒を引っ張っていかねば行事の成り立たない学校もあります。一方で学校によっては、先生はほとんど口を出さないというか、出してはいけない。生徒たちが自分たちで主体的に考え、どんどん進めていく。その中で少し暴走気味なところ、少しまずいところがあれば、それを修正していく形で、ほとんど口を出さずに行事を指導する。そういった学校もあります。学校を異動すると、やり方が180度変わってしまうこともあります。

それから、部活動の調整です。学校にとって部活動がどの程度重要なものかは結構違ってきます。学校の中で部活動を重要視して、だからこそ、いろいろなものの中心として考えていく学校もあれば、部活動を軽視するわけではないけれども、やはり勉強が一番で、あくまでも部活動はそこに付随するものという学校もあります。その違った体制の中でいかにその調整をするか。これも大きな仕事の一つです。

それから、生活指導。これも昨今「ブラック校則」などという言葉で話題になるところが多いものです。頭髪あるいは服装などの指導など、さまざまなものがあり

ます。こちら学校によっては、「本当にそこまでやる必要があるの？」と思いながらも、やはり生徒の学習環境を維持する、あるいは安全を維持する面から、一般の人が見ると「そんなこと、必要ないんじゃないの？」と思われることもやらなければいけない、もしくはやったほうがいいことも多々あります。そうした場合に教員は自分自身のポリシーや考え方、意思に反することがあっても、必要なことをやらなければいけない。そういう部分で生活指導部も、また非常に難しい部分を抱えています。

それから、進路指導部です。こちらは進学指導、あるいは学校によっては就職指導、それに関連した模試の計画。そういったものをやるのが進路指導部です。そして、特に進学関係は、都立高校では非常に気にされているところです。特に管理職、校長先生、副校長といったところは、ここが悪くなると自分たちのいろいろな問題に関わってくるので、昨今の都立高校では非常に注目される場所です。そして、私立高校でも進学率がいいかどうか、今度は経営に関わってくるので大きく影響され、すごく重要になってくる場所です。

自分自身がやりがいを感じた仕事―部活動の指導者

今までいくつか高校教師の仕事ということで話をしてきましたが、ここから先は僕が今まで教員として力を入れてきた部活動の指導を中心に話を進めていきたいと思います。一つは、部活動の指導者としての役割です。これを目指して教員になりたいという人もたくさんいて、もちろん僕もその1人です。なぜ教員になろうと思ったかと言えば、バスケットボールの指導をしたい。そこがあり、教員になったわけですが、自分がこういうものをやりたいというものがあれば非常に楽しいと思います。「楽しい」という言葉よりも、「達成感がある」という言い方でもいいと思います。「指導者としての役割」は、そういう意味では非常にやりがいのあるものです。

一方、技術指導など以外で、部活動の生徒の学習面あるいは生活面を管理する。そういう仕事も部活動の指導の中にはあります。高校野球で甲子園などを見ているとベンチの中に監督がいて、それ以外に部長先生というのですか、先生がいらっしゃる学校がほとんどだと思います。1人で技術指導も難しいのですが、技術指導とは別にそのほかの面を見る指導者も必要になります。

一般の都立高校では実際のところ、この役割を1人でこなしている方がとても多いです。もちろん顧問としては複数の先生がつくと思います。都立高校だと、1人の先生が二つから三つぐらいの部活動の顧問になります。僕の場合だと、バスケット

ボール部の顧問がメインとなり、それ以外に文化系のクラブの副顧問になっています。そして、メインの顧問の先生が都合の悪いときに面倒を見る形をとります。ただ、繰り返しますが、部活動の指導には大きく二つの役割がある中で、多くの先生はその二つの役割を同時にこなしている面が多いのが事実です。

部活の顧問の何が楽しいのか

そこで、この二つの役割、つまり部活動の指導者としての役割、それから技術指導以外の学習面、生活面での管理。そして、これが授業以上に生徒との関わりが多いと言えますが、僕の場合だと、一つのクラスは週に2回の授業で、公民科、政治経済、現代社会あるいは倫理と科目があります。一つのクラスには40人の生徒がいます。そうすると一人一人の生徒との関わり、言葉を交わしたりする場面は結構少ないです。

一方、部活動は週に4日、5日とあり、人数も多くても20人、30人なので生徒との関わりは非常に多いです。その結果、生徒とのつながりでは卒業生がやってくる。学校に訪ねてきて声をかけてくれる、あるいは「成人したので一緒に酒を飲みに行こう」と誘いにくる。そういったことがあるのは、やはり部活動の生徒が多いです。僕の場合は、そういうことが多いです。今でも何組かですが、お正月にたまに会うのはほとんどが部活動の生徒です。生徒との関わりが多くてやりがいがあり、楽しい場面がたくさんあります。ただ一般的には、僕のように部活動がやりたくて教員になった、そういう人以外のところでは、それがあまり楽しいとは思われていないのが現実なのかと思います。

もう少し具体的な話とすると、では部活動の指導者として何をするのか。それは技術の指導です。バスケットボールならバスケットボールのテクニク、技術を、どうやって教えていくのか、その教え方の研究をする。これが自分のところの選手に合っていないと、効果もなかなか出ない。どうやったらいいのかを研究しなければいけない。それから当然、新しい技術、あるいはスポーツの世界ですからルールも変わっていきます。そういったものを勉強していかなければいけない。

そして、自分のチームを1年間どうしようか。1年間ならこう、学期ごとだったらこう、この月はこう。このようにいろいろな計画を立てる。大事なことは、これは授業を進めるのと全く同じです。授業も授業の仕方を研究する、自分が教える中身を勉強する、そしてそれをどうやって教えていくかの計画を立てる。注目してほしいことですが、部活動の指導もやることは授業と全く同じです。そして、授業と同

等の準備が必要だということです。同じように研究して、同じように計画を立ててということであれば、当然同じように時間がかかるし、同じような準備が必要です。しかし、一般的にはそう思われていない。ここがまた一つ、考えなくてはいけないところです。

部活も授業もやることは同じ？

ところで、技術指導の行い方は授業のやり方の研究と同じです。具体的には技術書を読んだり、最近だと YouTube などにもいろいろな映像があるから映像を見たり、大学やプロの試合を研究しに行ったり、あるいはそういったところの練習を見せてもらいに行ったり、これは授業と全く同じようなことが必要になってきます。

そして、技術の研究も生徒に教えるに当たり、どのように教えようか、どんな技術があるのだろうか、自分の生徒にはどんなことが適しているのだろうか。この辺りが非常に重要になってきます。ここが自分の生徒と合わないとうまくいきません。もちろん目標などもありますが、「自分はこうやりたいのだ」ということと、それを受ける側の生徒がどう思っているか。そこが一致しないとうまくいきません。実際には、生徒とぶつかってしまった人たちをたくさん見てきました。自分自身でも「自分はこうしたいのに」と思いながら、そこがうまく生徒と合わなくて苦労した経験もたくさんあります。ただ、変な言い方ですが、これも一つの楽しみではあります。

そして、指導計画をどのように立てようか、目標をどこに置いていくのか、実際に何をしようか。そんなことを考えてみると、すごく楽しいですね。「やりがいがある」という言い方もあると思いますが、すごくたくさんやることがあり、「こんなこともやってみたい。あんなこともやってみようか」と思うことがたくさんある。「面白い」という言葉が当てはまるのかどうか分からないけれども、自分はそれが面白くて40年近くにわたり、ずっとやってきたところです。ただ、一般的にはなかなかそう思われていないことも現実です。

もう一つ、部活動の管理者としての役割という話も最初にしました。都立高校の中には「管理顧問」という言葉があります。要するに、技術とかの指導はしないけれど、活動するためのルールを生徒に守らせたり、場合によっては下校時刻を守らせる、あるいは勉強面の話をするという顧問の先生が必要です。前の場面でも言いましたが、実際はその部活動の指導、技術的な指導と、管理者としての部分を、1人でやっていらっしゃる先生がすごく多いのが現実です。

部活の顧問はブラック職場？

ここで教員の仕事と部活動に関わる問題を、いくつか整理してみたいと思います。中学校と高校では違う。つまり、中学校では部活にずっとついていなければいけないけれど、高校では必ずしもそうではないという話をしました。中学校の場合、部活動に関わる問題というと、部活動についていなければいけない結果として、部活動が忙しくてほかの仕事をする時間が取れない。いわゆる勤務時間の中では部活動についていなければいけないので、勤務時間が終わった後にほかの準備をする。先ほど、部活動ではこんな準備をするという話をしましたが、当然、授業でも準備が必要ですよね。そういう時間が取れない。だから部活動が、教員がブラック化する原因だという考え方があると思います。

高校の場合は必ずしもついていなければいけないわけではないので、その活動の時間帯に職員室で別の仕事をする事ができないわけではありません。ですから高校の場合には、単純に部活動が問題だと言われるのは勤務時間との関係です。多くの学校では、勤務時間が5時ぐらいまでになっていますが、部活動は6時前後までというところが多いと思います。その1時間は何なのだ。そこが一つ、問題とされています。

同時に、その1時間に対し pay の部分、報酬です。そこを指して高校の場合は、部活動がブラックの一因となっているという言い方をされるのではないかと思います。それはどうしてなのかを考えてみると、一番大きな原因は学校が部活動を授業と同じと考えていないからということです。部活動の準備には時間がかかるし、必要なものです。しかし、同じと考えていないので、部活動に割く時間がなかなか取れません。

そして、都立高校だと先生が異動する。世界史の先生が異動したら、代わりに世界史の先生が異動してくる。英語の先生がいなくなれば英語の先生が来る。授業の場合は当然のように、その専門の先生が異動してこられます。ところが部活のほうは、バスケットを教えている先生がいなくなった後に、必ずしもその種目を教えてくれる先生が来る形が確立されているわけではありません。もちろん全国大会を目指そうというレベルの学校では、そういった指導者をとってくることは当たり前です。しかし数多くの、一般の都立高校ではそういうことができないのですね。

だから、バスケットをやっていた先生が異動された後に違う先生が来た場合には、その人はそういった指導はできないけれど、「穴埋め」という言葉を使うといけなかもしれませんが、そのまま穴埋めのような形で部活動に入っていく。そういったことが多々あります。そして、自分が専門でもないのに入れられ、なおかつ時間外

に仕事をしなくてはいけない。そこから「ブラック」という考え方が出てきてしまうということではないかと思います。

部活動は外部委託でよい？

そこで部活動については外部委託する。学校で教えるのではなく、外部に任せてしまってもいいのではないかというは20年以上前から盛んに出てきている話です。外部委託とは違うかもしれませんが、水泳などについて言うと、多くの選手たちはスイミングスクール、スイミングクラブに入っていて、そこで練習をします。ただ、高校の大会に出るためには、高校の部活動にも所属していないとインターハイとかに出られません。そこで、部活動には入っているけれど活動は自分のクラブで行う生徒もいます。

サッカーなども結構あります。Jリーグクラブのユースチームなどに入り、こちらの場合は高校の部活には入らずに、学校が終わったら自分のクラブに練習に行く。そのような形があり、それを全てに当てはめる。要するに学校で部活動をやらずに、そういったところに任せる考え方はあります。しかしこれは、現状では一般的ではないだろう。Jリーグのユースチームにいて将来はプロになりたい、あるいはスイミングクラブにいて全日本の大会に出たい。そういったレベルの選手にとっては、そういうのもありかと思います。しかし、現在一般の学校で行われている部活動の代わりを社会体育、要するに一般の中で行う形にはまだなっていないのではないかな。

現状でも自分のクラスに、サッカーのユースチームにいて全国レベルの大会に出ている選手がいました。授業が終わるとクラブの練習に行くために、ものすごい勢いで帰っていきます。高校のクラブであれば試験の1週間前になると多少練習がなくなったり、練習が緩やかになることはありますが、ユースチームでは関係ないのですごく大変そうでした。大変だけれど、それを承知でやっているのだからという面があります。しかし、学校は学校、あるいは部活動に類するような活動は活動と分けることは、いま現在の状況では難しいところがあるのではないかと考えています。

部活にも楽しいことがたくさんある

そしてもう一つ、部活動の指導は、楽しい人にとっては楽しいですね。部活動の指導がやりたくて教員になる人もたくさんいる中で、これは教員の仕事としてや

りがいのある、すごく達成感のある仕事の一つです。ですから、ここを仕事の一つとして確立していくことができれば、「ブラック」と言われる面は減っていくかと僕は思います。

仕事の一つとして確立するのはどういうことか。東京都の場合はいま一番多くて、1週間に1人18時間の授業を持ちなさい。こういうルールが規定されています。当然その18時間の授業をやるために、いろいろな準備があるわけです。それ以外に部活動の指導があると時間がなかなか取れません。そこで部活動の指導をして、例えば土曜日、日曜日などに活動する場合には、授業の18時間を少し減らして1日休みが取れるようにする。もしそのようなルールがつくれれば、ブラックと言われる部分は減っていくのかと思います。つくれば、完全に部活オンリーだけではなく、授業もやりながら部活もやれる。そういう教員も必要だろう。あるいは教員にとっても楽しいだろうな。そのように僕は考えています。

最近の教員に求められること

ICT機器の活用

長々と話をしてきましたが、最後にまとめとして今の学校現場で求められていることです。いま現在すごく言われていることはオンライン授業、あるいはICT機器と言われるパソコンやその他のものを活用した授業をやれ。そういうことが、本当にいま現在求められています。今日もオンラインで話をさせていただいていますが、学校の授業の中でもすごく言われていることです。

いまオンラインをする、あるいはICTを使うことは結構面白く、それにはまってしまっている先生もいます。しかし、それができれば学校の教員はいいのだろうか。オンラインができることが一番大事なのか。その辺がいま学校現場では、すごく混乱しているところではあります。オンライン授業ができたほうがいいに越したことはないのですが、それだけではどうなのか。あるいは、そういう体制ができているのか。皆さんはこういったものに慣れているのかもしれませんが、これから教員になる場面においては、そんなに苦労しないのかもしれませんが、いま一つ大きく求められていることです。

考えさせる授業とは

同時にもっと大きな流れの中で言うと、学校現場で求められていることは、生徒にものを覚えさせるのではなく考えさせること。それが非常に重要視されるように

なってきました。昨年から始まった共通テストではいろんな問題を抱え、センター試験のままでよかったのではないかという意見がある中で始まりました。その中でも考えさせることが非常に言われています。僕らの学校現場に対しても、そういったことは盛んに言われるようになりました。

そして、いろいろな先生がいろいろな形で、その考えさせる授業に取り組んでいます。ただ、中には考えさせているふり、「ふり」と言うと語弊がありますが、考えさせている感じはあるけれど、実はあらかじめ答えが決まっている。そして生徒は考えているようで、その決まった答えに誘導されている。そういう授業もないわけではありません。決してそれをやっている先生が悪いというのではなく、準備をしたり、実際にそれを行う時間が足りないということです。

生徒に考えさせるためにはある程度時間を取り、あるいは決められた時間の中に当てはまらなくても、それはしょうがない。そういう形を取らないと、なかなかものを考えてもらうことできないのですが、決められた時間の中で、ある程度の決められた成果を出さなければいけない。そういう中で考えさせることに教育現場の難しいところが今あると思います。これから教員になろうと思っている皆さんには、覚えること、知識を詰め込むことだけではなく生徒に考えさせること。そのためには皆さん自身も、いろいろなことを考えてもらわなければいけません。その考えることがすごく大事だということは、頭に入れてもらえるといいかと思います。

高等学校教育の在り方とは

それからもう一つ、高等学校教育の役割は何だろうかということです。これについては昨年からのコロナの問題で、なぜオンラインの準備をしないのか、授業はオンラインでいいのではないかと、たくさん言われています。高校では40人の学級が多いのですが、40人や30人がある程度の時間を一緒に生活する。その中で人間関係であったり、あるいは人との接し方を学んでいく。そのことが学校教育の一番の役割ではないかと思います。もちろん授業をやって知識を入れていくことも当然必要ですが、学校の役割は人間関係などにあるのではないかと思います。今は必要に迫られオンラインの授業もあるけれど、可能になれば学校という場に集まって一緒にいろいろなことをやる。これが非常に大切かと、僕は考えています。

そういう中で部活動は、どんな役割を持っているのか。高校のクラスは、同じ学年の生徒が一つに固まる横並びの集まりです。一方、部活動ではたった三つの学年ですが、縦のつながりを意識したものです。横のつながりの同学年に対し、縦のつながりの部活動がある意味で、部活動は高校教育の中では大きな役割を持っていて、

すごく大事なものだと思います。だからこそ自分自身は40年近くにわたり、やりがいを感じながらやってきた、そう言えると思います。もちろん毎年「さあ、やるぞ」「やりがいがあるぞ」、そう考えるわけではありませんが、この40年近くを振り返ってみれば、そこにやりがいを感じたからこそ続けられたかと思います。

最後にまとめさせてもらおうと、いま学校現場ではブラックとかいろいろなことが言われてはいるけれども、やり方によってはすごく楽しい、すごくやりがいのある仕事だということを皆さんには思っていたきたい。そして、これからの学生生活の中で、ぜひ生かしてほしいし、教員になってもらえたらいいと思います。聞きづらいところがあったかと思いますが、僕の考えている話はこんなところですよ。どうもご清聴ありがとうございました。

【質疑】

質問 部活動の配属について、好きなスポーツとか、やったことのあるスポーツに配属される教師の方もいらっしゃると思います。しかし、経験のないことにつく人も多いと聞きます。それ自体は、あまりネガティブには捉えていなくて、今まで見てきた教員の方々の中で、部活動に配属されて初めてそれを知ったけれども、その競技を好きになったという先生方もたくさん見してきました。自分もそういう余地は絶対あるだろうと思います。ただ、やったことのないスポーツを指導しなければいけないところで、その指導に説得性を持たせるのはなかなか難しいと考えます。生徒に「この先生、このスポーツやったことないでしょ」と思われたときに、ほかのメンタル面などの指導だったらできるかと思いますが、技術面の指導で子どもたちに説得性を持たせていくには、どうしたらいいのかという質問です。よろしくお願いします。

見上 確かに、やったことがない部活動の、特にメインの指導者になることはあります。そんな中から自分自身がはまってしまい、とても好きになってやる先生方はたくさんいます。最初は生徒のほうも「この先生、やったことないのだな」と思うと、ついてこないことは確かにあります。

しかしそこは、自分がどのくらい一生懸命それに取り組んでいるか。そこが見えれば、生徒のほうも分かってくれるのですね。細かい技術とかは分からないかもしれないけれども、「この先生、一生懸命考えてやってくれている」というのは伝わると思います。最初から知ったかぶりという大変ですが、自分は分からないのに「こうだ」と強圧的に出てしまうとまずいかもしれません。

しかし、自分も分からないけど、一緒に勉強していこうという姿勢は必ず伝わると思います。

これは一般的な話なので、特別に強豪校や全国大会に行くレベルになると話は全く別です。一般的にはそういう学校には、全然やったことがない人をいきなり指導者につけたりすることはないと思います。そこはそれほど心配することではなく、あとは自分がどの程度そういったものにはまっていけるか、一生懸命やっているところを見せてあげるか。そこで生徒には伝わるのではないかと思います。

質問 教職課程で勉強し始めてから、学習指導要領の存在がすごく大きい影響を与えている印象を受けています。いい意味では指導の流れというか、ある程度自由性がありながらも、その流れを枠組みとして設けるものが学習指導要領だと思います。そして、もう一つの捉え方として制限です。私の場合は英語なので、英語の指導が今後どういう形が求められていくのか。そのことを海外の学校現場を参考にしながら考えることもあります。

先生ご自身の視点から学習指導要領がある中で教えることに対し、どういう考えをお持ちなのかを教えていただければと思います。

見上 学習指導要領がある中でという話がありました。これは実は教科により、ものすごく大きな違いがあります。自分は公民科、政治経済です。もちろん、学習指導要領はありますが、どこの学校にも公民科の先生は多くて2人、1人の場合もあるということで、比較的自由にできます。もちろん、学習指導要領から完全に逸脱してしまうわけにはいきませんが、かなり自由性がある教科です。

ところが、英語とおっしゃいましたが、英語の場合には学習指導要領というよりも、同じ教科を何人もの先生で教えます。翌年、1年から2年に上がれば、また別の先生が教えることがあるので指導の継続性ですね。学校の英語科の中で共通したものが必要になってきます。だから、自由度というに変ですが、そういうものはかなり少なくなってしまうと思います。高校生の場合で大学受験を控えていると、それに対応することもあるので、学校全体としてこうやろう。その中で多少なりの独自性は出せるのですが、結構やることが決まっている。その決まったことを、自分でどのように料理して授業をやるか。そこが一番求められるところです。

学習指導要領は大きな枠組みとして出されているものです。その一字一句、

本当に一つ一つ全部に気持ちを入れて考えているわけではなく、何となく全体の流れとしてアクティブラーニングですが、これは英語だけに限らず、どの教科でも全体の流れとしてあります。行った学校には英語だと10人近くの先生がいらっしゃる。場合によっては一つの学年を4人、5人で教えることになるので、そのグループの中でどうしていこうか。そこが一番大切な気がします。

質問 学校で部活というと、さまざまな子どもたちが集うということで、「部活を楽しめれば、それでいいや」という子と、「いやいや、何を言っているのだ。本気でやらないと楽しくないだろう」という子どもがいます。運動部だと想定しやすいですし、文化部でも競技性があるところにコミットするもの、吹奏楽でもあるかとイメージします。見上先生ご自身のこれまでの経験で、同じ部活でも部活に対するコミットメントが違った生徒たちが、ぶつかる場面に遭遇したことがあるのか。また、それにどう対処したり、対処が難しかったりというのがあればお聞きしたいです。

見上 これはものすごくたくさんあります。生徒同士というよりも、自分が思っている部活動と、それから異動していった学校の生徒の考え方が全然違うことはよくあることです。そして、先生方の中には、どんなところに行っても自分の理想とする部活動を貫く。そういうタイプの先生もいらっしゃいます。だから、それまでいた部員が全部辞めてしまう学校もないわけではないです。

僕自身は自分も楽しみたいけれど、生徒が楽しくなかったら意味がないだろうなということで、生徒のほうに合わせる。基本的には生徒の考え方に沿った形で指導するのが、自分自身のあり方としてはあります。1年、2年、3年とやっていき、部員は3年たったらず卒業していくわけです。自分の考えているものを少しずつ生徒に伝えていくうちに、自分の思っていたような生徒が部活動に集まっていく形が多かったです。

そして、生徒同士の間でも、「自分はやりたいのだ」と言う生徒と、「いや、そこまではやらない」と言う生徒も結構います。これについては「僕自身が指導するのはこういうことだよ」。つまり「休みの日に練習するのは、ある程度技術が上がったり、強くなるのが楽しいと思える。そうであればいいなということでやるのだよ」と、まず伝えます。それでも「自分は日曜日や土曜日はやらない」と言う生徒もいて、「それはそれでも構わないんじゃないの。その代わり、来たときは一生懸命やろうね」と伝えるようにします。

どちらが多いかにもよりますが、そんなに一生懸命やりたくない人は居づらくなってしまう。それはいけないのかもしれないけれども、そういう場面も多く見られると思います。教員として何をやらなければいけないかというところになると難しいのですが、一生懸命やりたいという子の面倒は、やはり見てあげなくてはいけない。1人でもそういう生徒がいたら、できたらその子の気持ちには応えてあげたい。そういう気持ちが僕にはありましたが、それが正しいのかどうかは分かりません。

「そんなことないよ。楽しく自分たちで遊んでいるだけでいいのだよ」と言う生徒がいるのは当然だけど、逆に言う「では、生徒が遊んで楽しいのだったら、遊ぶことにし僕が土曜日とか日曜日の休みの日に付き合うことはないよね」という話はしたことがあります。答えになっているかどうか分からないのですが、そんな感じです。

質問 生徒に主体性を持たせようとするときに、最初にお話しになったとおり、学校教育というと授業が第一にくる。そこで授業を通して、どう生徒に主体性を身につけるかということで、アクティブラーニングが必要だという捉え方ができると思います。しかしながら、そういう捉え方をしてしまうと、授業の中だけの主体性という狭い見方を自分の中でしてしまっていた。そうしたときに部活動でも、生徒の主体性は間違いなくあると思います。主体性が発揮されている学校もあれば、先生が見ているときだけはすごく頑張り、そうでないときには手を抜くようなことがあると思います。そういった部活動の視点からも含め、生徒に主体性を持たせるために教員がどういう働きかけ、取り組みを行うことができるのか。そのことをお伺いできればと思い、質問させていただきました。

見上 部活動の面での主体性というと、学校により随分大きな差があると思います。「主体的に君らがやるのだよ」と言って考えられる生徒もいれば、そうではない生徒たちもいる。すごく難しいところがありますが、僕の場合だと、まずみんなはどうしたいのか。新しいチームができたときに、この後みんなはどうしたいのかを確認しています。そして、「その目標があるのだったら、こんな練習かな、あんな練習かな」と示唆したり、あるいは生徒が考えたり、そういう形をもって主体性という感じを持っています。

練習メニューについても、部活動でこんなことをやるという計画をあらかじめ生徒に示し、「こういうことが必要だから、こんなことをやろうと思う」

という説明をします。そこで生徒が「いや、ここはこういうほうがいいのではないか。こういうことをもっとやりたい」と言えば、それを取り入れる形です。このように、最初に自分たちがどうなりたいかを自分たちで話し合ってもらうところから出発します。僕の場合はどこの学校に行っても、ピンからキリまでいろいろな部活動があるけれど、生徒には「みんながそうしたいなら、それに合わせて僕もいろいろなことを考えるよ」というところから始めます。それは「主体性」という言葉が当てはまるかどうかはわからないけれども、そういう形を取っています。

授業の話にもいきますが、授業のアクティブラーニングでも同じです。僕の場合は公民科なので、話し合いや討論をする場面がやりやすい教科だと思います。僕のほうから新聞の記事を示し、「今日はこういうことについて話し合ってみようか」ということもあります。生徒には「これから1カ月ぐらい、新聞などを見てみて、こんなことを話し合ってみたいということがあれば言ってみてね」。そう投げかけ、自分たちでテーマを考えさせることもやります。

「主体性を持って」という言葉を先ほど使いましたが、そんなに形式張ったことではなく、「押し付ける」という言葉は悪いのですが、そうではなく、全体を通して主体性という言葉で表せばいいのではないかと僕はそうに思っています。答えになったかどうか分かりませんが。

質問 私たちであれば教育実習に行く学校だったり、免許を取った後であれば、どの学校に行くのかを選ぶ際に、もちろん、選べないような状況もあると思いますが、先生がどういったことを重視して、学校をお選びになったのかをお伺いしたいのですが、教えていただければ幸いです。

見上 僕の場合は、1年目は公立学校の採用試験に落ち、大学に来ていた学校の中で私立学校を選びました。選んだというよりは、たくさん数がなく、選ぶ余地があまりなかったので、とりあえず「ここがあった」というところの試験を受け、採用されたということです。

これは私立の女子校でしたが、行ってみると自分の思い描いていた教員生活とは少し違う面がたくさんありました。自分は都立高校の出身で教員のイメージや教員生活は、やはり自分の育った都立高校のイメージが強かった。それとあまりにも違って、ここでは続けるのは無理だな。入ったのが4月で、5月の終わりには東京都の教員採用試験の申し込みをする感じでした。そして、「このままでは無理だな」と試験を受けました。

幸いなことに受かったので、翌年から都立高校に行きました。最初は工業高校で、これはもう選択の余地がありません。向こうから「この学校です」と言われて断ってしまったらどういうことになるのか全然わからなかったので、選ぶ余地はなかったです。今だと都立高校の場合、3校目以降は公募の制度があり、自分で学校を選ぶこともできるようなシステムがあります。試験というか、相手の学校の面接を受けたりして、採ってもらえれば行けるようなシステムです。以前はなかったのですが、そういうシステムも今はできています。だから「こういう学校がいいな」と思って受けることも、最近ではできるようになったということです。

それぞれ学校には特徴があります。部活動にすごく力を入れている学校もあれば、英語教育に力を入れている学校と、学校のホームページを見るとはっきり分かります。東京都の場合は、3校目からは選ぶこともできるようになっています。中高一貫高校が都立には10校ほどありますが、2校目に移るときに、そこであれば希望して行くこともできるように今はなっています。1校目については、ほとんど選択することはできないのが現状です。ですから1校目から島に行く人、中高一貫に行く人、あるいは勉強や生活指導のすごく大変な学校に行く人と、これはいろいろなので何とも言えない。東京都の場合はそういう感じです。

質問 選べるようなタイミングでは、その校風とかを重視してお選びになったということでしょうか。

見上 そうですね。校風というか、僕の場合は教科が公民、政治経済ということなので、1校1人しかいないので、そもそもそれほど空きがないのですね。選択肢がたくさんないので、その中ではホームページの様子を見て、部活動がどうだ、勉強がどうだ、あるいは制服があるとかないとか。そんなことの中から自分に合いそうなところ。もちろん、うちから通えることもありますが、そういう中で選んでいったということです。

質問 公立中学校とかに授業研究でおじゃますると、特に若手の男性教諭などはジャージで、「何でこんな大学の教授の話を聞かなければいけないのだ」というような顔をして、白けて、グラウンドが気になっているような先生たちがたくさんいらっしゃる、「授業づくりが基本なのに、何で向こうのほうに気になっているの」とこちらも少しムツとしたりして、いい関係が築けないところがありました。しかし、今日の先生の話のを伺い、「そうだよな。あちらはあ

ちらで先生たちも、授業の教材研究に当たるようなものをしっかりなさっている。もちろん種目や分野の中で徹底的に研さんを積まれ、メソッドも磨いていращるののであれば等価だよな」。そこは対話の余地があると反省したところです。

質問ですが、それでもなお思うことがあります。高校は空気が違うのかもかもしれませんが、中学校の教室におじゃましていて部活と先生との間で生まれてくる関係が、教室空間にかなり大きな影響を及ぼしている。それは観察させてもらっていて、よく思います。具体的に言うと、教師と生徒との間にほかの子たちとは違う、例えば顧問と部員との密接な関係のようなものですね。それがポジティブに働いていることもまれにありますが、たいていは先生が逆に子どもに甘えてしまっているところがある。困ったり、授業が行き詰まったりすると、その部員をある種ダシに使いながら授業を回していったり、内輪で盛り上がっていく感じで、周りの子どもたちがしらけてしまうような空気を観察事実としてよく見ます。そして先生は、案外それを無自覚でやっていращたりする。教室外での子どもたちの関係性が、部活だけにはよらないことを分かっているながら聞きますが、部活によるところがかなりあるだろうというのは、今日の話で余計にインパクトを受けました。教室に及ぼす教師と子どもの関係と授業の展開とで、先生なりのお考えやご意見とか、あるいは同僚を見ていて、あるいはご自身の省察でもいいのですが、お聞かせ願えれば幸いです。

見上 最初に、中学校と高校では、やはり違いはあると思います。特に中学校の場合は生徒がまだ子どもですから、先生の影響を受けたりする面はすごく強いと思います。そして、先生が熱心であればあるほど、その影響力はものすごく大きい。それは部活の場面だけではなく、授業の中でも「あれは部活の先生だ」というのは当然あると思います。

また、高校でもそういうものはあります。僕はそういうタイプではなかったので、そういうものを感じたことはあまりないですが、やはり部活の顧問の授業だけは必死に聞とか、そういうのは当然あります。それがいいように働いている学校も多々あります。例えば生活指導とか学習面が大変な学校では、それを部活の先生が引っ張っていき、何とか持ちこたえるような学校があるのも事実です。それはそれで必要なことではあると思います。ただ、高校の場面では、そこまで一般的な教員にはないのかな。それが全国大会に行くとか、そういうレベルになるとまた違うと思いますが、一般的な意味で

の指導者だと、それほど授業に影響はないかと思います。

今日は特にその話をという話だったので、その話を中心にしましたが、授業の準備、クラブの準備は結構大変です。いま話を聞いていただいている学生もそうかもしれないし、若い先生もそうですが両方、とにかく授業も部活も目いっぱいやろうとしてパンクしてしまう人がたまにいます。

いま部活動の話を中心にしましたが、僕の場合は授業関係では大学の先輩が研究会に誘ってくれたりしました。そこで授業のバランスも取りながら、その年にもよりますが、「今年は部活動に力を入れたいな」と思うときには、授業の手を抜いたわけではないけれど、少しバランスを取れるようにしてやってきました。研究授業を見るとすごく準備をして、立派な発表される先生がいます。若い先生がそれを見て、「すごいな。自分たちもこんなにやらなきゃ」と思うようです。

僕は若い先生によく言うけれど、「いや、それをずっとやるのは大変だよ」。やはりバランスが大切なので、授業の中でのバランスもあるだろうし、部活と授業のバランスあるいは担任の仕事とのバランス。そういったものを取りながら、いま聞いている学生たちには、自分は何が一番やりたかったのか。こんなことやりたいということがあれば、それは大事にしてもらいたいと思います。

質問 私は教員をやるなら公立高校で勤めたいと思います。先ほどの話にもありましたとおり、自分の希望する学校とは必ずしも言えないようなところに配属になることが公立の特徴の一つだと思います。私の不安は生徒の気質と自分が合わないとなったときに、どう整合性やバランスを取ってきたのか。自分の関わってきた人は、多かれ少なかれ自分と似たような人が多くなっているの、全く違う風土がある学校にポンと放り込まれたときに、どのように調整してきたのか。そこを伺いたいと思います。

見上 これはものすごく難しい、根本的なところなんです。公立学校だと、新規採用のときには希望が言えません。僕の場合には最初の何年かは、まだ希望して異動できる制度もなかったの、どこに行くか分からない状況でした。いくつか自分とは全く合わない学校に行ったことはあります。端的だったのは最初に行った私立高校でした。これは全く耐えられない状況で、都立の学校でもやはりあるのですね。

自分の精神的なバランスをどう取るかはすごく難しいのですが、一番合わ

なかったところです。どういう面が合わなかったかという、生活指導と言われる面です。頭髪指導と言われるような、髪の毛の色がどうだとか、そういうところは、自分にはどうしてもよく理解できなくてというところがありました。その場合にどうしたか。これはたくさんの人の前で言いにくいのですが、やっているふりをしてごまかした感じになってしまいます。

本当に自分はこれは無理だと思うことを無理にやっても、たぶん生徒にバレて余計悪い状況になってしまいます。表立って反発できないところはあるけれども、何とかその場を過ごしてきたのが現実だと思います。都立の場合だと、3年たつと異動希望が出せます。それ以前に異動することも可能ですが、そのときまではそういう状況に我慢しながらやってきました。あまり大きな声で言いにくいことですが、そういうのが現実だと思います。

質問　私は子育ても終わりましたが、子育てが一段落するまでは専業主婦をしていました。自分の子どもを育てていたときに、家庭生活の中で病気をしたり、いろいろなことが起こるわけです。そうしたときに教員という職業自体、5時で終業が決まっている。授業研究とか分掌などの基本的業務は、どんなことがあってもこなすべきだとは思いますが。生徒のときにはすごく楽しんでいた部活ではありますが、親として自分自身の家庭や子どもを守る中で、部活も担当してということが、私の時代は男の方は仕事にずっと懸け、主人も土日も出て行ってということは、女性が家を守っていたのでできたと思います。しかし、今後女性がどんどん出ていく時代になったときに、それでは難しいのではないかと思います。部活や課外活動は女性の進出を阻む一つの原因となってしまうのではないかと思います。その辺がこれからいい方向に向かっていかないと、自分の経験をもとに感じているところです。

見上　今のご質問は、確かにその面があると思います。お子さんがいるという理由でしたが、それ以外にも介護の仕事があるとか、いろいろな理由がある方がいます。高校の場合だと、「それでも遅くまで残って仕事をしろ」と言われる場面はほとんどないと思います。

部活の中には技術的な指導者としての側面、それから生徒の管理・監督者としての面、その二つがあるという話をさせていただきました。5時までしかできないということであれば、ほかにも顧問の先生がいらっしゃるの、その分、自分は部費の管理をするとか。部活動の役割には、ほかにもたくさんの仕事があるので、そういうものを分担することで、必ず土日出なければい

けないわけではないと思います。現実にはいま勤めている学校にもいろいろな理由から、自分は、土日は出られないのだという方も結構な数でいらっしゃるのです。部活動を一生懸命やっておられる方は、それを非難することはないと思います。

部活動をやっている先生が思うのは、「自分はこのようにやっているから他の人にやれ」というわけではなく、「自分はこういうことをやっているのだ」ということを仕事として認めてほしいというところではないかと思っています。僕はそれがやりたくてなったから力を入れてやるけれど、そうではない場面で力を発揮される方は、それで全然大丈夫だと思います。

そして、将来的なことを考えてみれば、部活動も仕事の一つとしてそれに力を入れる人と、授業のほうに主に力を入れる人と、学校の中でも分けて考えていけるように、完全に「部活動だけ」と言われると、プロの指導者ではないので、それはそれで困るのですが、授業もやりながら部活動もやる先生と、授業のほうに重点をもっと置きながらやる先生とか。要するに、学校が部活動も大事な仕事だと認めてもらえるようになると、もう少しいい方向に行くのではないかと僕は思います。

質問 部活に対して問題視しているところがあります。子どもが部活を途中で辞めることができないという制度がすごく多いと思います。部活や学校という社会が、子どもにとっての世界だから辞めることができない、ムラ社会のようになっている。私自身もそうだったのですが、辞められない理由でもう一つあるのは、「続けることが正義」という根性論がはびこっている感じがします。実際、途中で辞めた生徒は、「最後まで続けられなかった者」というレッテルを、チームメイトだけではなく顧問も向けている部分がすごくあったと思います。そしてもう一つ、保護者や顧問が連携して、ある意味熱血化してしまい、さらにブラック化している問題もあると思います。忍耐力をつけることは確かに大事なことで、私も部活を通してそういうものは身についたと思います。忍耐力をつけさせる部分が、受験などの部分ともかぶるというか、社会に出るためにつらいことを学ばせる部分が側面としてあると思います。もう一つ思うのが、競争主義を生んでしまっている部分が結構あると思います。例えば運動部と文化部の間に序列ができたりしますが、それは部活だけではなく、スポーツができることを個性ではなく能力値として測ってしまうような、運動会などの存在があることも多分理由だと思います。そういった

いろいろな問題があり、本当に部活をやる意味が学校としてあるのかということでは、疑問なところがすごくあると思います。その辺はどのような考えがあるのか、お聞かせ願えれば幸いです。

見上 答え方が難しい。僕が今まで勤めた都立高校は七つ、八つですが、都立高校では部活が辞めにくいという経験はないです。やっていて自分に合わないと思ったら結構辞めていくような学校でした。先生の中には教育の一環として、部活動を続けさせたほうがいい。そう思っておられる先生がいるのは事実だと思います。僕はそういう考え方ではないので、そこにはついていけない部分もあります。

部活動を学校でやる意味があるのかということです。僕は単純に、生徒に部活がどうなってほしいかといったら、「3年間続けて、やっていてよかったな。そう思ってもらえるといいな。そのようになってほしいのだ」生徒にはそのようにいつも伝えていきます。嫌々やってもしょうがないから。僕はバスケットボールが好きだから言うのですが、「バスケットって楽しいな。部活って楽しかったな」と思ってもらえたらいいな。生徒にはそう言っています。

だから「自分に合わないということがあったら言ってごらん。みんなで話して直せるところは、もしかしたら直したほうがいいことがあるかもしれない。どうしても自分に合わなかったら、辞めることは一つの選択肢だよな」という話はよくします。忍耐力をつけるために部活をやるとは、僕は全然考えたことがない。自分がやりたいからというか、やったら楽しいから。練習の苦しさとかは当然あるけれど、やってみたら「楽しいことのほうが多かったな」と言えるといいな。それが部活動の一つの役割だと思います。

いま、運動ができる子は能力が高い面があるのではないかという話でした。しかし、学校の中にはいろいろな生徒がいて、勉強ができる生徒もいれば、運動が得意な生徒もいれば、歌がうまい、楽器がうまいと、いろいろな生徒がいていいと思います。運動ができる子はそこを頑張ってみるのもいいし、勉強が得意な人は勉強を頑張ればいい。そういう人たちをお互いに認め合えていけるのは学校のよさだろうという気はしています。

先生の中には「部活動なんて意味がない」。そう思っている先生も結構いると思いますし、それは全然否定しません。僕は「そうは思わないよ」という形で話をしますが、社会の中でいろいろな人がいるのは仕方ないのかとは思いますが。答えになったような、なっていないような答えて、すみません。